

## 桑港の点描

一九五二年八月十三日、羽田空港を出て太平洋　それは大海というよりも果しない雲海であるが　を渡ってサンフランシスコについては八月十四日である。サンフランシスコは、北アメリカ西海岸の貿易港で、シアトルやロスアンゼルスと共に日本人には馴染の深い地名だ。この街は、太平洋に突出した岬の丘陵に横たわっている起伏の多い街で、人口はまず七、八十万といわれている。ただこの街が最近目立って膨脹しつつあることは、郊外の新市域が急速に拡張されて、新住宅がどしどし建てられている状況からみて見当がつく。

朝鮮事変以来、アメリカの軍備は急に拡充されているが、その軍事予算の相当部分が、カリフォルニア選出の国会議員の努力で、この地方に投入されているとこのことで、各工場は非常な活況を呈している。そのため、住宅の不足は相当なもので、日本の庶民住宅式の粗末の木造住宅が、郊外の至るところに建てられている。もとより、中には大きい鉄筋コンクリート建のアパートも数戸建てられて、もう入れる許りになっているが、大部分は、木造の五、六戸収容で

きるアパート式住宅や、小さい二軒長屋式の規格住宅である。かような住宅建築と並行して、中流の文化住宅の建設も盛んなものだ。それは最近の一般的傾向として、裕福な人々は、市内に住宅を持たないで続々郊外に移っている。日本流に計って三、四十坪の文化住宅が、広い道路の両側に軒を並べて建てられている。試みに、その建築費を尋ねて見ると、二万ドルから三万ドルというから、邦貨に換算すると、七、八百万円から千万円見当のもので、もとより我々には手の届かない代物である。また貸家も建てられていて、十五坪内外のアパートで百ドルから百五十ドル見当の家賃だそうだ。普通サラリーマンの月給は、特殊技能のあるもので三百ドル、然らざるもので二百ドルが標準だそうだから、百ドルという家賃は決して軽い負担ではないと思われる。

街は起伏こそあるが、清潔で明るい美しい街である。二十階から二十六、七階の高層建築も建っているが、普通のデパートとか商社は、大抵三、四階から十階位の建築に収まっている。高層な立派な建築は日本では銀行が多いが、ここでは大抵ホテルである。街を歩いてみて驚くことには、人が非常に少いことだ。銀座辺りはもとよりだが、高松の片原町を歩いてみても顔、顔の連続であるが、ここではラッシュアワー以外は、歩いている人が珍しい位である。

かつてアメリカから日本に来たある要人に「日本に来て一番驚いたことは何ですか」と尋ねたら、言下に「人が多いことです。人の圧力です」と言われたことがある。ただクリフという海岸近くの盛り場や公園等を歩いてみると、これは日本に劣らない人出である。それは農村の景気がよいので、農村からの見物客が多いのだと土地の人は言っていた。デパート等を歩いてみて気のつくことは、室内が明るく清潔であること、柱が空色であれば天井は肉色という具合に濃い明るい色彩に彩られている。品物の値段は決して安くはなく、むしろ日本より高いと思われる。ただ日本は包紙が立派だが、向うのは粗末なものである。店員の中に老婆が多いのに驚いたが、自分の収入で自分の暮し向を立てて行くという心懸けに違いあるまいが、何だか哀れさを催さず風景ではある。

サンフランシスコには世界に誇る二つの大きな橋がある。その一つは有名な金門橋（延長七マイル）であり、他はベイ・ブリッジ（延長八マイル）だ。何れも一九三三年に着工して前者は一九三六年に、後者は一九三七年に竣工した。工費は前者が三千五百万ドルであり、後者は七千七百万ドル、使用鋼材は両者で三十万トン、セメントは百五十万トンといわれている。幅員は何れも二十メートル位で、二階になっていて、上は乗用車が、下の道は電車とトラックが

それぞれ走っている。サンフランシスコの気候は、七月と八月が比較的寒く、霧が多いところで、街を歩いている婦人連中はオーバーを着ている者もある。今度、講和会議がここで開かれることになった一つの理由は、ここの夏が涼しいからだそうだ。

在留邦人の数は約六千人で、戦争中収容されている間に、日本人街には、大勢の黒人が入って来て、店舗や住宅を占領されたそうだが、現在ではぼつぼつ復帰している。私は奈良県出身の福田さんのお宅で在留邦人数人と食事を共にしたが、話はむしろ内地のこと許りで、郷愁というものは強く且つ根深いものだとしみじみ感じた。

## 大陸横断

サンフランシスコで一日滞在了私は、八月十五日夕方、ワシントンに向うべくシカゴ行の汽車に乗り込んだ。アメリカの鉄道は、日本のように国有国営ではなく、全米を幾つかのプロックに分け、夫々の民間の会社が経営している。カリフォルニア地帯は南太平洋鉄道会社が、オグデンからオマハにかけての中部地帯は太平洋沖合同鉄道会社という具合に。従って列車

は色々の会社の所有にかかる車輛が連結されて出来上っている。それに尚面白いのは寝台車だけは、それ等各鉄道会社とは別に、ブルマンという会社の所有と経営になっていることだ。私が乗った列車の寝台車でも、老齡の人のよさそうな白人の案内人と一人の黒人のボーイがついている。構造は日本の一等の寝台と殆んど変りがないわけだが、床にじゅうたんをしきつめてあることと、談話室が別に一輛ついていて、ビールを飲んだり、コーヒを味わったりできるようになっているのが日本と違つところである。

軌道は勿論五フィートの広軌で、車体は幅も広いし背も高く且つ長さも長い。それにプラットフォームが、日本のように土盛を高くしてなく背が低くなつていたので、車体は一層高く大きく見える。ただ、私が期待していたよりも、振動が大きいことと、発着の時間が正確でないことは、アメリカの鉄道のために惜しみたい。振動が激しいのは、路盤の手入れが十分でないのだとしか思われぬ。時間が正確でないのは、人の氣質にもよるだろうが、汽車の旅だから別に急がないというわけであろう。アメリカでは、飛行機の旅行が一般に普及しているので、急ぐ旅行は大抵飛行機によつてゐる。従つて汽車で旅行するのは、よくよく時間にかまわぬ悠長な人種と荷物だと推察しても大きい誤りはないだろう。汽車の窓は三重になつていて全部

しめきつてある。空気の入替えや温度の調節は、天井でやるようになってゐる。食堂車は鉄道会社が変わることに変わるわけだが、いずれも黒人がボーイとしてかいがいしく働いている。

大陸横断の汽車の窓から見る景観は実に単調なもので、最初の二日間も明けても暮れても原野と言おうか、沙漠と言おうか、果しない無人地帯を走るのみ。山はハゲ山が多く、ロッキーマウンテンにかかつて、はじめて樹木らしい樹木を見たに過ぎない。中部のオグデンに近くなつて、大きい塩湖を横切ると、漸次耕地と牧場がみられるようになり、それが今度は又ワシントンまで続いている。文字通り野から出て野に入る太陽と月を三日間、仰いだわけである。ところどころに点在する農家の構えは、われわれが想像していたよりもずっと粗末なものだ。駅々に淋しく立つてゐる駅員の社宅も、日本の駅員の官舎と選ぶところはない位簡素なものだ。

牧場では牛の放牧が一番多く、羊がこれに次ぐようだ。耕地では、馬鈴薯と高粱を一番多く見受けた。ただそれが一枚の畝で四、五町もあるうかと思われような大きい畝に無造作に蒔いてあるのだから豪華なものだ。相乗りの人に聞いて見ると、だいたい日本流に勘定して、一つの農家の耕地面積が、二十五町歩から三十町歩位に当るようだから、日本の農家にとつてはそれは縁のない高嶺の花である。途中、汽車が給水する時間や車輛を入替える時間を利用して、

オグデンの街の食堂に入ろうとすると、給仕人が日本人らしく主人夫婦も日本人らしいので話しかけてみると、愛媛県の岬の出身で木之元という人だった。この人口八万内外の地方都市に、日本人が九十世帯ばかりいる、ということには驚いた。そこで米の飯と味噌汁を御馳走になった。かいがいしく働いている十七、八の娘さんや、母にもつれついている四、五歳の子供に別れを告げて、黄昏れた駅前の大通りを引きかえした私は、何かしら哀愁の想いと郷愁の念に駆られて涙ぐんでいた。しかしなお考えてみると、あの人達が却って郷愁にさいなまれている私を憐んでくれているのかも知れないと思ったりした。